

推敲あれこれ

水上英季×高野公彦

……………

⑰



「サバ」と言うのと同じ(笑)。
水上 あるいは「桃色の桜」とか(笑)

◆大きな言い方

朝顔のフリルのやうな赤い花太陽に灼かれその終を見ず (原作)
朝顔のフリルのやうな赤い花しをれてしまふ八月の昼 (改作)

◆漢語が多い

高野 歌の推敲について、電話による対談で選者の皆さんにお話を伺っています
が、今月は水上英季さんに登場していただきます。幾つか推敲例を用意していただきました。もしこれが自分の歌だったらこう直す、という実例です。

晴天に両面羊歯の葉が光る鮮緑色の群生光る (原作)

晴れた日に両面羊歯の葉が光りまみどり色の葉叢が光る (改作)

水上 これは漢語が多すぎるので、できるだけ和語に直してみました。

高野 作者は、漢語の大好きな「漢語オ

タク」ですね(笑)。

水上 「両面羊歯」も漢語ですが、これは植物名なのでそのままです。それから原作は「光る……光る」がちよつと変だと思いましたが、「光り……光る」としてみました。

高野 いい工夫ですね。

みづみづとオレンジ色のにんじんが並びてゐたり野菜売場に (原作)
みづみづと夕焼け色のにんじんが並びてゐたり野菜売場に (改作)

水上 にんじんの色を言うのに、同じ青果仲間のオレンジを持つてくるのは幼稚なので、「夕焼け色」にしました。

高野 いいですねえ。「オレンジ色のにんじん」なんて、たとえば「イワシ色の

水上 上句の「朝顔のフリルのやうな赤い花」は素敵なんです、下句が大げさなので変えてみました。
高野 まさに「その終を見ず」は大げさですね。

水上 「しをれてしまふ八月の昼」は大し過ぎますか？

高野 大人しいけれど、これでいいんじゃないですか。命のはかなさを感じさせますよ。

わが庭の柿の木あまた実を付けけり雀が来るよ鴉が来るよ (原作)
わが庭の柿の木あまた実を付けぬ雀が来るよ鴉が来るよ (改作1)

わが庭に柿の木あまた実を付けて雀が

来るよ鴉が来るよ

(改作2)

水上 これは三句目「付けり」が文法的に間違ひなので、直しました。

高野 広辞苑を見ると、助動詞「り」は四段活用の動詞及びサ行変格活用の動詞に接続する、と解説されています。他の動詞には接続しない。

水上 はい、それで「付けぬ」にしたのが改作1です。でも「ぬ」は打消しの意味に勘違いされる恐れがあるので、最終的には「付けて」にしました。
高橋 いいですね。改作2は最高の仕上がりです。

◆「狭庭」は古い

わが狭庭いこいの場なり雀来て蝶も遊べり草取りをせむ (原作)
わが庭はいこいの場なり雀来て遊ぶを見つつ草取りをする (改作)

高野 ここからは私の用意した推敲例です。庭のことを「狭庭」と言うのは謙遜か、あるいは雅語でしょうが、古臭い言い方ですね。先ほど水上美季さんの挙げ

た歌にあったように、「わが庭」でいいんです。水上さんは「狭庭」を使ったことがありませんか？
水上 いいえ、ないです。

高野 原作は、庭を見て「草取りをしよ」と思っているんですが、改作は実際に草取りをしている場面になりました。
水上 蝶を消して雀だけに絞り込んでいますから、場面が鮮やかに浮かんで来ますね。

澄んだ瞳に侵攻のこと問う少女「なぜ始めたの誰が悪いの」 (原作)
澄んだ瞳で侵攻のこと問う少女「なぜ始めたの誰が悪いの」 (改作)

高野 この歌を読むと、初め「澄んだ瞳」に向かって侵攻のことを問う少女」という意味に読んでしまう。

水上 「澄んだ瞳で」なら、直ぐ少女の瞳だと分かります。

高野 「澄む瞳にて」ならいいんですが、それを「澄んだ瞳に」とされると読者は困るんです。例えば「船にて佐渡に近づく」を「船に佐渡に近づくと」言われたら困るでしょ？

水上 「船に佐渡に近づくと」は、サンドの富沢に言わせれば「ちよっと何言ってるか分かんない」です。(笑)。

◆「待ちわびる」は決まり文句

父さんの帰り待ちわび豆まきの前に肩車せがみし思い出 (原作)
父親の帰りを待ちて豆まきの前に肩車せがみし遠き日 (改作)

高野 待つことを「待ちわびる」というのは決まり文句ですね。

水上 私も使わないようにしています。ただ単純に「待つ」と言えば、それでいいと思います。

高野 原作の最後は「思い出」と言っていますが、説明的なので、「遠き日」にしました。「父さん」も普通の「父親」にしました。水上さんも子どものころ豆まきをしたでしょ？

水上 はい、父が帰ってくる前に豆まきをした記憶があります(笑)。

高野 本日はどうもありがとうございます。